

FORUM

Vol.27

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース
「フォーラム」

第27号

CONTENTS

巻頭言 2

理事・副学長（教育研究担当）兼
21世紀科学研究機構長 石井 実

コラム 3

文学研究の余白に

人間社会学研究科長
高等教育推進機構副機構長 山崎 正純

授業報告 4

工学域・工学研究科 教授
大多尾 義弘

学生調査データ分析報告 5

ー初年次教育プログラムの満足度ー

FD ワークショップ報告 6

「あたまの中の評価基準を『みえる化』する方法
- ルーブリックを用いたパフォーマンス評価の実践 -」

大学教育学会第37回大会参加報告 7

編集後記 8

巻頭言

● 理事・副学長（教育研究担当）兼
21世紀科学研究機構長

石井 実

ISHII MINORU



石井 実

ISHII MINORU

理事・副学長（教育研究担当）兼21世紀科学研究機構長

1983年京都大学大学院博士課程修了（理学博士）。1985年大阪府立大学農学部助手。同講師、助教授、教授を経て、2005年より生命環境科学研究科教授。2003年副学長・学生部長（～2005年）、2005年副学長・学生センター長（～2009年）、2010年特命副学長（～2013年）、2013年副学長。2015年4月より現職。専門は動物生態学、昆虫学、保全生物学。

「地域の信頼拠点」を目指して

世界的には人口増加と経済活動のグローバル化が進む中、日本など先進国では人口減少、超高齢化社会を迎え、大阪でも住民の健康や福祉問題、地域コミュニティ・地場産業の衰退問題、環境・防災問題など、解決すべき課題が累増している。そのような背景の中で、文部科学省は平成25年度に「地（知）の拠点整備事業（COC 事業）」を開始し、本学は大阪市立大学と共同で「大阪の再生・賦活と安全・安心の創生をめざす地域志向教育の実践」の課題を申請し採択された（COC: Center of Community）。本学の事業担当者を務める立場からこのプログラムの特徴と進捗状況を紹介したい。

このプログラムでは、両大学共同で学士課程に「地域再生（CR: Community Regeneration）副専攻」を開設し、地域に山積する課題を知り、それらに取り組む意欲とスキルをもつ人材を育成する。受講生は入門科目の「地域実践演習」で地域の複合化した課題に接し、「アゴラセミナーⅠA」「同ⅠB」で課題解決に向けた知識やスキルを学び、最後に「アゴラセミナーⅡ」の課題演習に取り組む。これら4科目8単位の必修科目群以外に、受講生は「地域志向共通教育科目」と「地域志向専門教育科目」の中から10単位以上を選択し修得することで、卒業時にCR副専攻の修了証書を授与される。学生がこの副専攻に取り組みやすいように、「地域志向専門教育科目」は各学域の専門科目から選定し、それ以外の必修・選択科目は教養科目となっているこ

とを付け加えておきたい。

この副専攻を立ち上げるにあたり、21世紀科学研究機構に「COC 研究所」を開設するとともにCR部会を設置し、大阪市立大学と連絡をとりながら制度設計を行ってきた。このプログラムの特徴のひとつは、地域課題に取り組む教員の研究プロジェクトに学士課程の学生を参加させるPBLの手法を取り入れている点にある。そのため、このプログラムでは教員の地域貢献研究に学内補助金を供与するとともに、堺市や大阪府の研究所などと「CR テーブル」と呼ぶ意見交換の場を設けて地域課題を探り、その解決のための研究プロジェクトを立ち上げる仕組みを構築した。

今年二年目を迎えた「地域実践演習」は12クラスが開講され、全学域から154名の学生が受講している。アクティブラーニング型の授業形態のため、15名を各クラスの上限としていることからすると、学生の評判もよいことがわかる。受講者の多いクラスとして「地域から考える＜ママと赤ちゃん＞支援ネットワーク」「観光的魅力度の向上による地域の活性化」「生き物図鑑を利用した守屋池における生物多様性保全の取り組み」などがある。

本学は、基本理念として「高度研究型大学～世界に翔く地域の信頼拠点～」を掲げている。これまでも多くの教員が、研究や審議委員会参加などで地域に貢献してきた。このプログラムにより多くの地域志向の人材が育成され、さらに本学の地域からの信頼が高まることが期待される。

文学研究の余白に

近代の文学作品が作者の意図の特権性から切断されていること、また不特定かつ匿名の読者による反復的な読書行為において、テキストの同一性の確保もままならないものであることなど、今や周知のことに属する。だがそうした文学理論上の議論にもかかわらず、作者概念が間テキスト性のなかに溶解して消えたといえず、依然として作品が作者の意図の外在化であることが前提とされ、読者の欲望の究極的な対象であり続けているのはなぜだろうか。

読むという行為が単に意味の現前とその差異化のプロセスにとどまらないということを我々に示唆しているのは、ベンヤミンの「暴力批判論」である。近代を生きるということは、世界という巨大な書物に書き込まれた究極的意味を所有する行為であり、近代小説は世界という巨大な書物の代理であって、そこには超越的絶対者の残した痕跡が刻まれているはずである。

この痕跡の意味を解読することで、人々は罪を犯す危険から身を遠ざけ刑罰を避け、贖罪の憂いを抹消することができる。したがって近代小説を読むことは、超越的絶対者の審判から身を隠し、その恐怖心を忘れることなのだが、そのためには是が非でも作者概念が必要であり、作者の意図の外化である近代小説を、作者の意図とあわせて一挙に所有してしまおうという欲望が産み出される。なぜなら世界は小説世界に

再現前しており、それを解読することで、世界の外部にある超越的絶対者の意思を作者の意図において発見することができるからだ。超越的意味の世界と切り離された近代という時代を生きる不安が、文学という装置とともに、作者という新しいアクターを発明したのだといえる。

このように考えるとき、近代小説が描きうる世界には大きく三つの類型があることがわかる。まず、解読の果てに世界の外部＝不可視の境界線が発見され、危険が回避されるという類型。次に、その解読が失敗に終わり（あるいは解読に成功したにもかかわらず）、外部の暴力（神話的暴力）によって世界が破壊されるという類型。最後に、世界の外部の痕跡を発見しようとする欲望が近代人を消耗させていく視点から、作者概念の虚構性を暴きたてるという類型である。第一の類型がロマン主義文学の、第二の類型がリアリズム文学の、第三の類型がポストモダン型小説の基本構成だといっても誤りではないだろう。

この三つの類型に共通するのは、〈生き生きとした現在〉として世界を自らのものに置き、自由にそれを管理し処分するという意味での所有という概念である。第一の類型は、世界の所有に成功し、第二の類型はそれに失敗し、そして第三の類型は所有の概念の改変によって、世界の情報化とその次元での新たな所有を可能にしているといえるだろう。

文学という近代の装置は、無限に拡大する世界をどこまでも追跡し記録し解読し続けるにちがいない。この装置を否定することは、人間存在そのものを破壊することに等しい蛮行に他ならない。



山崎 正純

YAMASAKI MASAZUMI 人間社会学研究科長 高等教育推進機構副機構長

1992年大阪女子大学国文学科に助教授として着任。2005年3大学統合により大阪府立大学へ。2015年4月から現職。専門は日本近代文学。博士(文学)

初年次ゼミナールを担当して 「安全な機械・構造物を求めて」

大多尾 義弘

工学域・工学研究科 教授

著者は専門科目として、工学域では「機械設計」「機械材料」、工学研究科の博士前期課程では「弾性力学特論」などの講義を担当し、機械・構造物の設計等に関する研究を行っています。2012年4月から始まった初年次ゼミナールを3年間担当しました。最初にどのような内容(テーマ)にするか大変迷いましたが、自分の専門に関連する内容にしました。そのためか大半の受講生は工学域の所属でした。

最近、安全を揺るがす大きな問題が頻繁に起こっています。機械・構造物といった人工物は目的とする機能を発揮するために作られます。そのため一番大切なことは十分な性能を発揮することですが、これにも増して重要なことは壊れないで安全に使用することができることです。しかし安全と機械・構造物のコストにはトレードオフの関係があり、実際には非常に難しい問題です。この授業では、自分たちの課題をそれぞれの関心に応じて見つけて、安全とは何かを考え、どうしたら安全な機械・構造物を作ることができるか、又は安全に使用するにはどうすればいいかを考えていくような内容です。また、安全がキーワードなら特に機械・構造物でなくても構わないことにしました。

授業の第1回から第5回までは、図書館ツアーを含めレポートの書き方、プレゼンテーションの仕方および機械・構造物の概要・破壊・事故事例に関する講義を行いました。第6回では機械・構造物の安全についてグループで考えてもらいました。第7回では各自のテーマ名とその選定理由を決定してもらい、それ以降は各自の発表が主になりま

す。この授業で特に工夫した点は、前に出て発表する機会を多く持つようにしました。前に出てしゃべることが苦手な学生がこの授業を通して、少しでも発表に慣れてもらえればとの思いです。(1)自己紹介、(2)グループ発表、(3)テーマ名とその選定理由、(4)見方・捉え方および現状・問題点について、(5)安全な機械・構造物に必要な事柄について、(6)自分の発表を再考(2回)と計7回の発表の機会があります。発表に慣れるためにメインの発表時間(持ち時間)を5分→10分→15分と変化をつけました。発表の順番により不平等が生じないように発表順は当日にくじで決めました。また、各発表には、1名の司会係(ベル係)を立候補により選定しましたが、全員が均等に担当します。これは、司会することで実際の講演会等の進行を経験してもらうためです。特に気をつけた点は、自由に考えを述べ合える雰囲気作りでした。堅苦しい授業ではなく、クラス全員が打ち解けた雰囲気になるように。

最後に授業を実施しての感想ですが、基本的にパワーポイントによる発表を指示しましたが、習得は早いです。発表時、質問に答えられなかった事項でも次に発表する時に答えている学生が多く見られました。また発表順をくじで決めたので、当日自分の発表があたるかどうか楽しんでいるように見受けられました。学生の発表は回数を追うごとに上手になりました。この授業を受講して、少しでも勉強することが楽しいものだ、また発表することが苦手でなくなったと感じてもらえたかなと思っています。

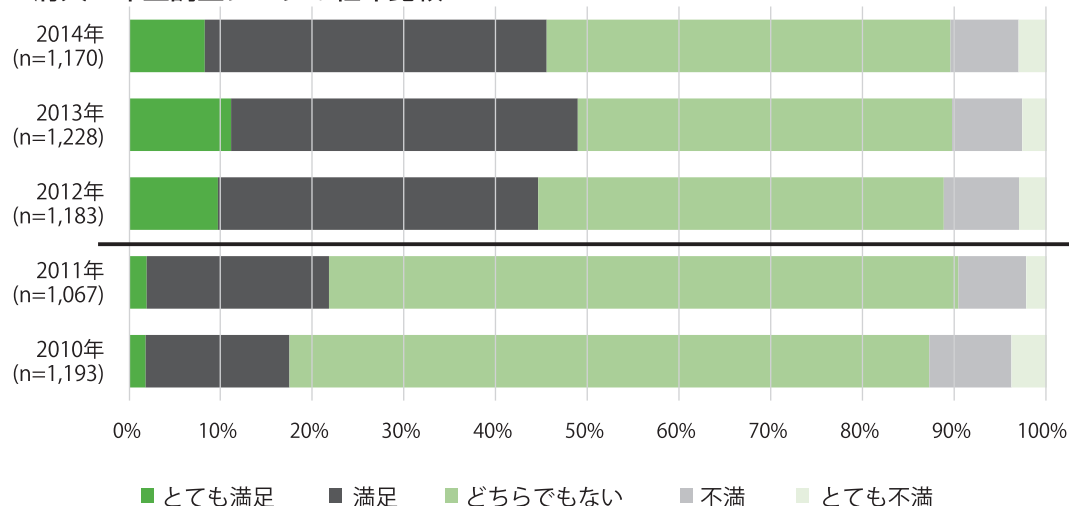
学生調査データ分析報告

初年次教育プログラムの満足度

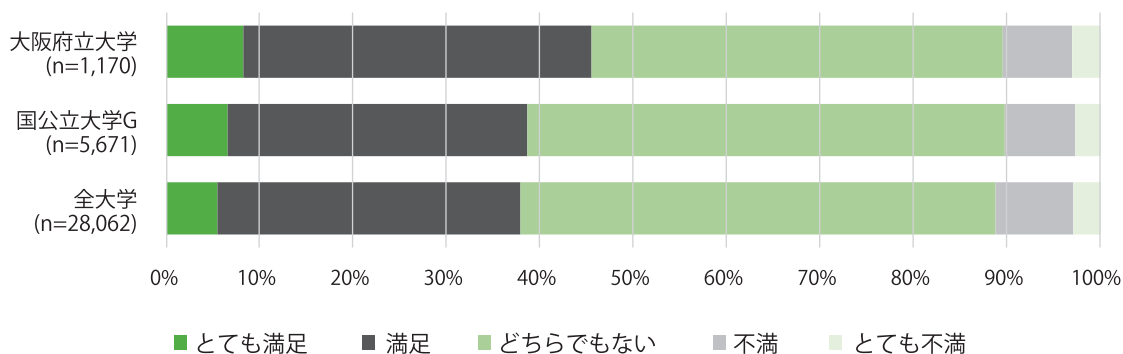
本学では、全国の大学と連携して「相互評価」を活かした教育の質保証に取り組んでいます。本学も運営校として加わる「大学IRコンソーシアム」には、全国の国公立大学41校（2015年9月現在）が加盟し、一年生調査、上級生調査等の学生調査を共同で実施するとともに、学生の単位取得状況や学習行動、学習成果、教育の効果等に関する基礎データを蓄積し、分析しています。

今号では一年生調査より、「大学教育への満足度：初年次生を対象とした教育プログラム内容（フレッシュマンセミナー、基礎ゼミなど）」について、府大の一年生調査2010年～2014年の比較と、一年生調査2014年の他大学との比較をしてみました。

1. 府大一年生調査データの経年比較



2. 一年生調査2014年の他大学との比較



※2014年の一年生調査に参加している全大学34校と、その中の国公立大学グループ9校との比較（全大学及び国公立大学Gの数値には、府大の数値が含まれています）。



経年比較では、2012年から初年次ゼミナールを導入したことにより、学生の満足度が大幅に上がったことが表れています。他大学と比較しても満足度はかなり高く、少人数ゼミを全学必修で90クラス以上開設するという府大の初年次プログラムは、成果を上げていると言えます。（深野）

「あたまの中の評価基準を『みえる化』する方法 - ルーブリックを用いたパフォーマンス評価の実践 -」

高等教育開発センター 特認助教 畑野 快

学生の知識や能力を評価するために様々な課題を私たち教員は出します。学生が授業を通して獲得した知識を評価するためには一問一答式のテストを実施しますが、得た知識を活用する能力を評価する際にはレポートやプレゼンテーションなどの課題を出します。前者に関しては評価の基準（問題に正解するかどうか）が学生・教員双方にとって明確ですが、後者に関してはどうでしょうか。学生は教員の評価の基準を理解しているのでしょうか。学生が理解していないだけでなく、自分でもその基準は明確でないのかもしれません。このような評価基準をマトリクス形式で示したものがルーブリック（rubric）です。ルーブリックは一問一答式のテストのように知識の定着を問う課題ではなく、レポートやプレゼンテーションなど知識の活用を問う課題を評価する際に役立ちます。

高等教育開発センターでは、ルーブリックについての知見を学内に広めていくために、文部科学省補助事業「大学教育再生加速プログラム（AP）」の一環として、9月2日、ラーニングコモンズでFDワークショップ「あたまの中の評価基準を『みえる化』する方法 - ルーブリックを用いたパフォーマンス評価の実践 -」を開催しました。学類・課程に参加者を募り、27名（ワークセッションは25名）の先生が参加されました。ワークショップは①レクチャーセッションと②ワークセッションに分けて行われました。①レクチャーセッションではルーブリックの概念的理解とその使用に関する国内外の動向についての報告を行い、また、私自身が「初年次ゼミナール」で導入したルーブリックや、高等教育推進機構の清原文代教授からは初修外国語（中国語）で活用しているルーブリックについて、授業で導入した経緯や評価についての事例報告がなされました。②ワークセッションでは参加された先生に自分の授業に即したルーブリックを作成してもらい、最後にポスターセッションを行うことでそれらの共有を図りました。最後に実施したアンケートでは、“授業を振り返る良い機会になった。”、“ルーブリックが客観評価の有効なツールであることがよく分かった。授業でも活用してみたい。”などのコメントをいただきました（当日の映像、資料、参加された先生が作成したルーブリックについては学内限定で以下のURLから参照することができます <http://www.ap.osakafu-u.ac.jp/all-seminar/>）。

ルーブリックを作成するために専門的な知識は必要ではありませんが、簡単に作成できるというわけではありません。なぜならルーブリックは様々な要素と関わっているからです。例えば、ルーブリックは課題を評価する基準であるため、“どのような課題を出すか”ということを決める必要がありますし、その課題は授業の達成目標に即したものでなければなりません。また、学生の能力も考慮する必要があります。このように授業の目標、課題、学生の能力など授業全体を俯瞰し、何度も作り直すことでより精度の高いルーブリックを作成することができるのです。



大学教育学会第37回大会参加報告

西田 悠輔

(教育推進課 教務グループ 副主査)

大学教育学会第37回大会は、「ところで学生は本当に育っているだろうか？」という統一テーマのもと、平成27年6月6日、7日に、長崎大学において開催された。私は、大会の自由研究発表の場で、本学のIR活動について口頭発表を行った。また、ラウンドテーブル、公開シンポジウム等にも参加した。

「大阪府立大学における教学IRの実践と展開—学生調査の結果から—」というテーマで行った発表では、本学のカリキュラム改革のひとつであるAcademic English導入について取り上げ、その経緯と効果検証について、学生調査等の結果を用いて報告した。本学の教学IR体制については、他の大学関係者からも興味・関心を持っていただけており、質疑応答の時間以外にも質問等を受けた。教育推進課に異動して間もない私の拙い話にも熱心に耳を傾けていただき、有意義な意見交換ができた。また、本大会の自由研究発表は職員によるものも多く、大学業務への熱意と豊富な知識に感銘を受けた。

ラウンドテーブル「学士課程教育における共通教育の質保証」では、学修成果について直接評価と間接評価を総合的に用いて評価する方策の検討をされている森利枝先生(大学評価・学位授与機構)の報告等を受けて、GPA等で得られる直接評価と学生調査等で得られる間接評価をどのように結び付けるのか、あるいはそもそも結び付ける必要があるのかといった議論が起こった。このラウンドテーブルに参加し、直接評価と間接評価という2つの評価の特徴を、理解し活用する必要性を改めて確認できた。本学は、高等教育開発センターを中心に、これらのデータ収集・分析に力を入れている。自らも関わっているこのような業務が、大学教育の充実に不可欠であることを再認識する好機となった。「これらのデータ収集・分析は教育目標の達成度を測るためのものである」とい

う、このラウンドテーブルで強調された言葉は、特に印象に残っている。

公開シンポジウム「学生の育ちをみる」では、溝上慎一先生(京都大学)の「正課で身に付く『コミュニケーション能力』と正課外で身に付くそれとは質が異なるものである」という指摘や、早川信夫氏(NHK解説委員)の「ものさしづくりのエキスパートがもてはやされていないか？」といった、それぞれの見地からの提言に刺激を受けた。

本大会中は、他大学の先生方ともお話しできた。印象深かったのは、私が教員ではなく職員であることを知ると皆一様に歓迎し、激励の言葉をかけてくださったことである。多くの教員が、大学教育には、事務職員の積極的な関与が必要不可欠であると考えていることが分かった。そして、日々の業務においては事務的なサポートに留まらず、積極的に教員と対話し提案できるような職員になっていかなければならないと痛感させられた。また、熱意ある職員の方々とお話しする機会を通して、大学で働くことの魅力を再認識した。



編集後記

今回の「フォーラム」では、原稿の締め切り日が後期の始まりの時期と重なってしまいました。この忙しい時期、原稿のご執筆を頂いた皆さまには、改めて御礼申し上げます。

教員と職員の協働という言葉が合い言葉のように、ここしばらく言われています。「大学教育学会第37回大会参加報告」を読みますと、従来のイメージとは異なった議論がされたことが分かりました。教員と職員との協働ということについて、考え直す機会となりました。

また、コラムの「文学研究の余白に」にも刺激を受けました。(高根)

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース「フォーラム」

平成27年12月10日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学
高等教育推進機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
<http://www.fd-center.osakafu-u.ac.jp/>
印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

<編集委員> 新井 隆景(センター長) 小泉 望 小島 篤博 高根 雅啓 高橋 哲也 谷口 栄一 塚本 民雄 畑野 快 林 利治
深野 政之(主任) 星野 聡孝(副センター長) ペピン ハンス・ヨアヒム 水鳥 能伸 森岡 次郎 山崎 正純
<事務担当> 岩上 由紀 長尾智香子 藤岡 真弓